# 吸血鬼学園へようこそ

凛江・作
riri・絵

アルファポリスきずな文庫

# 目次


プロローグ …… 6
第一章 孤島の学園へ …… 7
幕間 生徒会室にて① …… 91
第二章 事件発生 …… 97
幕間 生徒会室にて② …… 144
第三章 第三、そして第四の事件 …… 149
幕間 生徒会室にて③ …… 172
第四章 犯人の正体 …… 175
幕間 生徒会室にて④ …… 191
第五章 戻ってきた平穏 …… 256
エピローグ …… 275

# 人物紹介

## 緑山さおり

女子寮の寮長で生徒会メンバー。ひかるに対しては冷たい態度をとっていたが……？昴にご執心な様子。

## 相田美雪

墨島学園の生徒で、ひかると親友になった女の子。他の生徒同様、超お嬢様。おしゃれには厳しい。

## 紫野

天涯孤独になったひかるを迎えに来た青年。墨島グループ総裁であるひかるの祖父の部下。ひとりぼっちのひかるに親身になってくれる。

## 青野 獏

成績優秀な生徒会メンバー。クールな性格。成績で煌に勝てないことを苦々しく思っている。

## 藍崎 煌

ひかると同じクラスのイケメン男子。生徒会メンバーの一員。無口で無愛想だけど、時々優しい。低血圧。

## 黒川ひかる

この物語の主人公。高校一年生の女の子。天涯孤独となり、大金持ちの祖父に引き取られる。

## 桃谷 泉

女の子大好きな生徒会メンバー。『桃谷クラブ』というファンクラブがある。

## 墨島 昴

墨島学園の生徒会長でひかるのはとこ。学園の人気者。

# プロローグ

（……いやっ！）

プツリと皮膚の破られる感触に、ひかるは心の中で小さな悲鳴を上げた。

がっちりと両腕で抱え込まれ、逃げるどころか身動きさえとれない。

逃げなくちゃ、大声で助けを呼ばなくちゃと思っているのに、体に力が入らないのだ。

それは今まで経験したことがないような不思議な感覚だった。

首筋に牙を突き立てられ、自分が吸血されているのだということは理解している。

でも、痛くはないし、全身から力が抜けていく感じが妙に心地いい。

（だめ……、もう……、でも、どうして彼が……、）

意識が遠のいていく。

相手を引き離そうともがいていた腕がだらりと垂れ、膝ががくりとくずおれる。

そして意識を手放す瞬間ひかるが目にしたのは、捕食者の赤く光る瞳だった。



# 第一章　孤島の学園へ

「……すごっ」

降り立った瞬間、ひかるはその光景に驚いて目を見開いた。

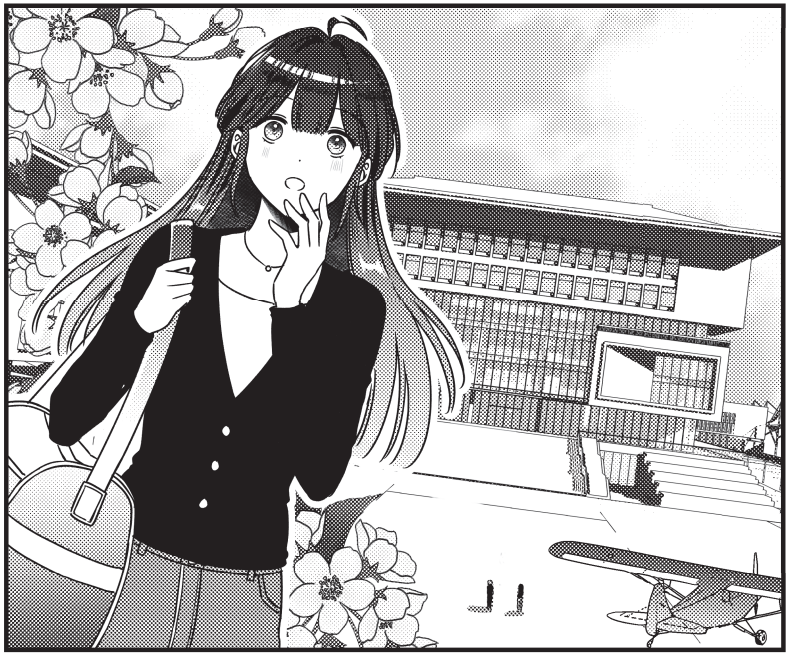
理事長が用意してくれたというセスナ機に乗って約一時間半。

着陸したその島は、全くの別世界だった。

目の前に広がる、まるで白亜の宮殿のような建築物。

小さな島のほぼ全部に広がるこの建物たちが、墨島学園高等部の学舎だ。

国内でもトップクラスの財力を持つ家の子女しか入学できないと言われ、超セレブ学園



と名高い、あの墨島学園である。
「おばあちゃん、私、ここでがんばるからね。それでいいんだよね」
ひかるはそびえ立つ白亜の建物に向かってそう言うと、大きく深呼吸をした。
そして、目まぐるしく変化したこの半月あまりに思いをはせた。
この半月間、一生分の涙を使い果たすくらい泣いたのだ。
祖母のためにも、自分のためにも、いつまでも泣いてはいられない。
「顔を上げて、前に進まなきゃ」
黒川ひかる、十五歳。明日、ここ墨島学園高等部の転校生になる。

二週間前、突然ひかるの父方の祖母が亡くなった。
幼い頃交通事故で両親をいっぺんに亡くしたひかるを、ここまで育ててくれた祖母が。
その日の朝、登校するひかるに、「いってらっしゃい」と朗らかに手を振っていたのが、ひかるが見た生きている祖母の最後の姿だった。
「おばあさんが倒れて、救急車ではこばれたそうだ。急いで病院に向かいなさい」
授業中の教室に飛び込んできた担任教師にそう言われた時は、何かの冗談だと思った。



だって数時間前まで、祖母は元気に笑っていたのだから。
（大丈夫。おばあちゃんはあれで案外そそっかしいから、庭で転んだとかそういうのだよ。近所の人が大げさに騒いで救急車を呼んじゃったとか、絶対そういうやつ）
ひかるはそう心の中で念じた。
つい一ケ月前に地元の公立高校に入学したひかるに、「おばあちゃん、まだまだ頑張らなきゃ」と笑っていたんだから。

両親を亡くしているひかるにとって、祖母は唯一の家族だ。
もちろん両親は大好きだ。自分をおいて死んでしまったことを恨みもしたけど、だからといってひかるは自分が不幸な子だと思ったことはない。
それくらい、祖母はひかるに愛情を注ぎ、何不自由なく育ててくれた。
決して裕福だったわけではないが、愛情深い祖母に守られ、二人、寄り添って生きてきたのだ。
だから祖母は、絶対にひかるをおいていったりはしない。
しかしそう祈りながら向かった病院で、ひかるに突きつけられたのは残酷な現実だった。

病室で再会した祖母の顔は、すでに真っ白くて四角い布に覆われていたのだ。
「おばあちゃん」
ひかるは布をめくると、信じられない思いで祖母の腕を揺すった。
「おばあちゃん、起きて」
しかしどんなに揺すっても、どんなに呼んでも、祖母は二度と目を覚まさなかった。
祖母は自宅の庭先で倒れていたらしい。
花の苗を植えていたらしく、右手にスコップを握っていたと、救急車を呼んだ隣のおばさんが教えてくれた。
多分ほとんど苦しまずに、あっという間に逝っただろうという医師の言葉だけが、救いだった。

自宅に戻ると祖母の親族たちが集まってきて、祖母の枕元で言い合いをはじめた。
一人遺されたひかるをどうするのかで揉めているらしい。
高校に入学したばかりのひかるが、一人で生きていくなど出来っこない。
これからは、この親族のうちの誰かに引き取られ、小さくなって生きていくしかない



のだ。
それさえ無理なら、高校を退学して働くしかない。

でも今のひかるは先のことなど考えられず、ぼんやりと畳の縁を眺めていた。
今この状況がどうしても信じられなくて、まるでずっと夢の中にいるみたいだったのだ。
（おばあちゃん、私も連れてってくれればよかったのに……）
ひかるはふらりと立ち上がると縁側から庭に出た。
見上げれば、満点の星空が広がっている。
小さい頃なら「おばあちゃんはお星さまになって私を見守ってくれてる。あの星の一つがきっとおばあちゃん」なんて思ったかもしれないが、もう十五歳のひかるは死んだ人が星になることなんてないと知っている。
でも、じゃあ祖母の魂はどこへいったのだろう。
まだその辺にいて、本当にひかるを見守ってくれているのだろうか。

そうしてひかるが庭先でぼんやりとしていると、家の前に一台の車が停まったのが見

えた。
また親族の誰かが来たのかと門の外に出てみると、暗がりでもわかるような高級車が停まっている。
そして車から降りてきたのは、見たことのない紳士だった。
二十代後半くらいであろうか、仕立ての良さそうな黒いスーツをパリッと着こなした紳士は、門の前で突っ立っているひかるに、涼やかにこう言った。
「墨島剣造の代理で、孫娘であるひかるお嬢様をお迎えにあがりました」
ひかるの運命が変わった瞬間である。

◆

「ではお嬢様、私はここで。正門を入ったところにはとこの昴様が迎えに来ているはずですから」
紫野の声で、ひかるの意識は一気に戻った。
セスナ機に乗って島まで同行してくれた紫野の仕事は、ひかるを学園の正門に送るまで



だったらしい。
「紫野さん、色々ありがとうございました」
「いいえ、これから頑張ってください、ひかるお嬢様。何か困ったことがあったら気兼ねなく私に連絡してくださいね」
「はい」
かすかに微笑んだ紫野に、ひかるは深々と頭を下げた。
まだ『お嬢様』と呼ばれることには慣れないが、この半月余りずっとそばにいてくれた紫野と別れるのは少し寂しい。
あの日、突然ひかるの前に現れた紫野は、ひかるが墨島グループ総裁墨島剣造の孫だと言った。
墨島グループといえば旧財閥の企業グループで、その名を知らぬものなどいないほど有名なグループである。
もちろんそんな話をすぐには信じられなかったが、紫野はひかるの母の写真など見せながら丁寧に説明してくれた。

その説明によれば、ひかるの母は墨島剣造の一人娘だったという。
母はひかるの父と恋仲になり、剣造が用意した縁談を蹴って駆け落ち。そのまま、周囲の反対を押し切って結婚したらしい。
そして、二人の間に生まれたのがひかるだった。
家を捨てた娘とその夫を剣造がどう思っていたのかはわからないが、今回ひかるの唯一の家族だった父方の祖母の訃報を聞き、引き取ることを申し出てきたのだという。
ひかるを育てた祖母が、自分に万一のことがあったら墨島家に連絡がいくよう手配していたのだ。
ひかるの将来を思ってのことだろう。
ひかるは祖母の葬儀が終わって諸々の手続きが片付き次第、剣造が理事長をつとめる墨島学園高等部に編入し、学生寮に入ることになった。
ここで問題がひとつ。墨島学園といえばその名を知らぬ者はない超有名なセレブ校だ。
ど庶民のひかるにとっては一生縁のなかったような学校である。
正直気後れするし、今通っている高校から転校したくもなかった。
まだ入学して一ヶ月しか通っていないし、勉強を頑張って頑張って学費無料の特待生として入れた高校なのだから。
祖母に育ててもらったひかるは、将来祖母に恩返しをするのが夢だった。
勉強もスポーツも頑張って、良い学校に入って、良い職に就いて、祖母を安心させてやりたかったのだ。
（でも……、おばあちゃんはもういないんだ。それに、私に選択肢はない）
あの日、紫野の話を聞いた親族たちは明らかにほっとしていた。
それに、墨島家に世話になることを、祖母だって望んでいたのだ。
黙って決断を待っていてくれた紫野の方に向き直ると、ひかるは彼の目をしっかりと見上げた。
「どうぞ、よろしくお願いします」
そう告げた瞬間、ひかるの墨島学園行きが決まったのだった。
その後紫野は、祖母の葬儀から納骨まで全て手配してくれ、この半月あまり、ずっとひかるのそばにいてくれた。
「ひかるちゃん、よく来たね」

墨島学園高等部の正門まで迎えに来てくれた少年は、爽やかな笑顔でひかるに微笑みかけた。

スラリとした長身に甘いマスク。とてもキラキラしていて、絵本の中から飛び出した王子様みたいな男の子だ。

「生徒会長の墨島昴です。困ったことがあったら何でも言ってね」

そう言うと昴はひかるの前に右手を差し出した。

「黒川ひかるです。これから、どうぞよろしくお願いします」

ひかるは深々と一礼した後、右手を出して昴の手を握った。

すると、繋がれた右手を通して、じんわりと熱が伝わってくる。

(何……!?)

電流が走るとまでは言わないが、まるで何かが流れ込んできたような感じに、ひかるは驚いて手を離した。

「どうかした？」

昴が心配そうに顔を覗き込んでくる。

「い、いえ……。ごめんなさい、なんだか静電気が走ったような気がして……」

失礼なことをしてしまったと思い、ひかるは慌てて言い訳をした。

「そっか、大丈夫？」

「はい、気のせいだったみたいです」

ひかるがそう答えると、昴は懐っこい笑顔を見せた。

「よかった。そんなに緊張しなくていいからね」

(この人が昴さん、優しそうな人……)

ひかるはちょっとホッとしていた。

自分にとっては遠い世界であったセレブ校に入ることも、誰も知り合いがいないところに突然放り込まれることも、やっぱり不安だったから。
ここに来るまでに紫野から少しだけ昴のことを教えてもらっていた。
墨島昴は、ひかるのはとこにあたるらしい。
ひかるの祖父剣造の、弟の孫だというのだ。
けれど、ひかるが剣造の孫であることは周囲に伏せることになっている。だから、ひかると昴がはとこ同士だと知っているのはごく一部の人たちだけ。

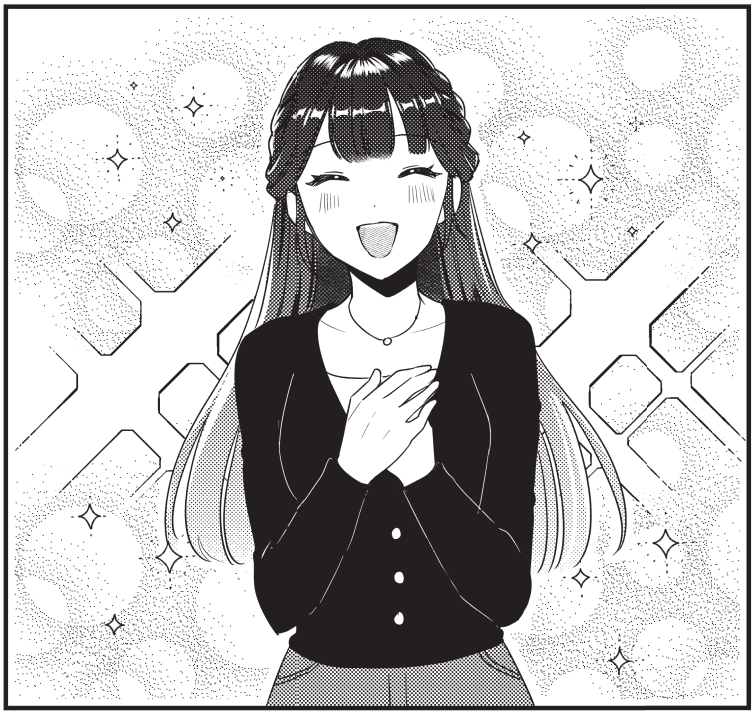
「……ああ、それから、ひかるちゃん。僕以外にも二人、生徒会の役員を連れてきたんだ。こっちが生徒会副会長の藍崎煌で、こっちが会計の青野漠。二人ともひかるちゃんと同じクラスになるみたいだから紹介しておこうと思って」
昴の言葉に顔を向ければ、彼の後ろに二人の男子が突っ立っている。
昴とは対照的に、二人ともその表情は不愛想で、とてもひかるを歓迎しているとは言い難い。
大方、昴に無理矢理連れてこられたのだろう。

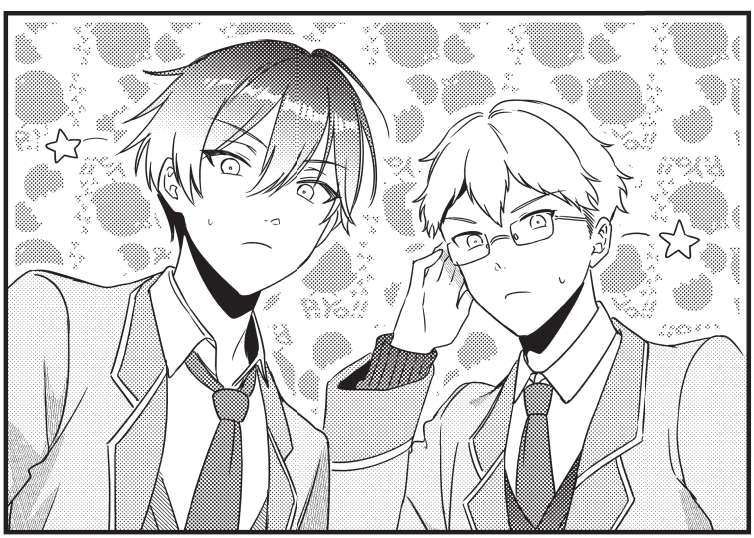


「ほら、二人とも挨拶して」
昴に促され、二人は渋々といった感じで自己紹介した。
「藍崎煌だ」
「……青野漠だ」
藍崎煌という男子も昴と同じで背が高く、目鼻立ちの整ったいわゆるイケメン君だ。
仏頂面の上、切れ長の目が冷たい印象だが、それはひかるを歓迎していないというより、そもそも興味がないように見える。
ただ、目だけはしっかりと合わせて挨拶してくれた。
「ええと……、よろしく」
ぶっきらぼうにそう言うと、ついっと視線をそらす。
一方で青野漠という男子は色白で綺麗な顔立ちをしてはいるが、銀縁の眼鏡をかけ、少々神経質そう。彼がひかるに送る視線には、何故かはわからないが敵意さえ感じた。
初対面だというのにそんな態度をとられ、ひかるは目を丸くした。
伝統あるセレブ校にひかるのようなど庶民が転校してきたのが気に入らないのだろうか。
青野のようにあからさまな態度をとる人も、まだまだいるかもしれない。

墨島学園高等部はほとんど中等部からの持ち上がりで、転校生も珍しいと紫野に聞いた。
（珍しいならもっと歓迎してくれてもいいのに。でも、まっ、いっか。なんだって最初から上手くいくわけないもんね）
そう、ひかるは自分のメンタルは結構強めだと自負している。
それに大好きな祖母を失って、これ以上失うものなんて何もない。
二人の男子の仏頂面を見て、何かいい意味で吹っ切れたようにも思う。
ひかるはにっこり笑うと、「どうぞよろしく！」と少々大きな声を出した。
面食らったような顔をする二人に、ひかるはさらに満面の笑みを見せる。
そして寮まで案内してくれるという昴の隣を、軽やかに歩き出した。

墨島家は旧財閥の家柄を誇り、長い間政財界に力を持っている一族である。
現在は墨島グループと称し、金融、交通、製造業とあらゆることに手を伸ばして成功を収めてきた。
そしてその墨島家が教育界にも手を広げ、約八十年前に設立したのが、幼稚舎から大学までそろったここ墨島学園である。





墨島学園は政財界で活躍する人材を多く輩出していることで人気だが、その分、入学難易度が高く、日本トップクラスの偏差値と倍率で有名である。

校風も独特で、中等部からの全寮制にもかかわらず、ＰＴＡが存在せず、学園の自治は全て、生徒会をはじめとする生徒たち自身に任せられている。

一方で外部の人間から学園内の様子が分からない、閉鎖的な一面もある。

特に高等部からは、生徒たちは地図にも載らないような小さな島で暮らすことになる。

この島は墨島家が無人島を買い取ったもので、島全体が学園の敷地になっている。

その上、長期休暇以外は島外に出ることが叶わず、連絡も制限されるという徹底ぶりだ。

スマホは使えるが島外には繋がらず島内のみの使用となっているし、インターネットの使用も制限されている。

それでもこの学園が人気なのは、最初に言ったとおり、卒業生があらゆる分野で活躍しているからだ。

超難関校の上、全寮制で莫大な費用がかかることから当然裕福な家庭の子女しか入学できない。それゆえ、墨島学園は超セレブ校と言われている。



女子寮に向かう道中、昴は目に入る建物などの説明をしてくれた。

その案内によると、学園に建てられているのは校舎だけではないという。まるで一つの町であるかのように商業施設、病院、娯楽施設まで揃っている。

おしゃれなカフェやレストラン、ショッピングモールに、映画館やアミューズメントパークまであるのだから、これなら島の中だけで充分生活が出来るだろう。

女子寮の入り口で寮長である女子生徒に紹介され、そこで昴とは別れた。

寮の外観もまるで西洋のお城の様だと思ったが、中もすごかった。

エントランスは天井まで吹き抜けになっていて、目の前には宝塚の大階段のような景色が広がっている。

思わずぽかんと口を開けて辺りを見回していたひかるを、女子寮の寮長は呆れた目で見ている。

（庶民感丸出しだったかな……。でも仕方ないよね。そもそも私、ど庶民なんだから……）

女子寮の寮長は緑山さおりと名乗り、二年生で、生徒会の副会長もつとめているらしい。

大人びていてとても綺麗な女性に見えるが、ひかるに向ける目はどこか冷たい。

エントランスで素っ気なく自己紹介するなり、さっさと部屋に案内され、寮の規則な

どは後で目を通すようにと冊子を渡された。
危惧していた通り、ここまで会った昴以外の生徒会メンバーはひかるに冷淡だ。
そういえば、部屋に案内される間にすれ違った女子たちも、ひかるを何か異質なもののように見ていた。
どうやらこのセレブ校は、新参者の庶民に厳しいところらしい。

「うわぁ……」
案内された部屋に一歩足を踏み入れた瞬間、ひかるは再び口をぽかんと開けた。
これまでの様子から期待してはいたが、これは想像以上だ。
リビングとベッドルームに分かれていて、一人部屋としてはもったいないくらい大きい。
アイボリーの壁紙にドレープの美しい、淡い若草色のカーテン。
ふかふかの布団と枕が乗ったベッドには、今すぐダイブしたいくらいだ。
クローゼットには明日から着る予定の制服と、それ以外にもひかるの好みとサイズに合った服が揃えられている。
転入することが決まってからすぐ、服のサイズや好きな色などを紫野に事細かに質問さ



れたが、あれはこういうことだったのかと納得がいく。
「感謝、しないとな……」
制服を手に取り、ひかるは呟いた。
まだ顔を合わせてはいないが、全て母方の祖父である理事長が準備してくれたものだ。
もちろん学費も生活費も全て祖父が出してくれている。
直接礼を言いたかったが、忙しい祖父は時間が取れないとのことで結局会わないまま島に来てしまった。
有名人ながらメディアへの露出もなく全く人前に出ないとの話だから、ひかると会うのも嫌なのかもしれない。
でもお礼の手紙は書いたので、紫野を通じて届いているはずだ。
勘当するほど両親の結婚を許せなかったのに、なぜ今になって手を差し伸べてきたのかなど疑問はたくさんある。
でも、親戚の家で肩身の狭い思いをするか、高校を退学して働くかしかなかったひかるに、祖父はこんな未来を与えてくれたのだ。
「頑張らなきゃ……」

ずっと努力してきたから、努力するのは得意だ。
いつか祖父と会った日に胸を張れる自分でいたいとひかるは思う。

荷物の整理をしているとドアがコンコンとノックされた。
開けてみると、可愛らしい女の子が立っている。
女の子は隣の部屋の相田美雪で、ひかるを夕食に誘いに来たと言う。
美雪はふんわりした髪をリボンで結び、これまたふんわりとした可愛らしいワンピースを着ている。
見るからに、良いところのお嬢様風だ。
「お隣の部屋に転校生が入るって聞いて、とても楽しみにしていたの。私たち、クラスも一緒なのよ。仲良くしましょう？」
そう言って微笑む美雪に、ひかるは嬉しくなった。
この学園での友人第一号だ。
この学園の高等部はほぼ中等部からの持ち上がりで、いわゆるよそものはほとんどいないらしい。



そんな中、美雪は珍しく高等部から入学した生徒なのだという。父親が外交官で、幼い頃から十年以上海外に住んでいたからだ。
そんなこともあってか、自分と同じように途中から入ってくるひかるのことを、本当に楽しみにしてくれていたようだ。
美雪に誘われたひかるは、すぐに彼女と一緒に夕食に向かおうとした。
でも、部屋を出てきたひかるを見て美雪は目を丸くした。
「まさかあなた、そんな恰好で夕食に行くの？」
「……そんな恰好って……？」
ひかるは自分の恰好を見直した。
肩くらいまである黒髪はちゃんと一つに結んで、部屋着に使っている中学時代のジャージは洗濯してあるから汚くないはず。
お気に入りのスリッパは好きなキャラクター入りだ。
「……何か変なの？」
「運動の時以外ジャージなんてありえないよ！　だいたいその足から出てるへんてこな耳は何？」

「へんてこって、スリッパだけど。耳じゃなくて、かえるの目がついてるんだよ」
「かえるのスリッパ!? そんなの、どこで売ってるの？」
おしゃれにはこだわりがあるのか、おっとりした雰囲気とは打って変わって指摘する美雪に、ひかるは渋々着替えることにした。
しかし、少し綺麗めのジーンズを履こうとするとそれも却下される。
「やめてよジーンズなんて。それに、その穴！ 許せない！」
「これは、わざとダメージで……」
「だめだめ！ そんなの履かないで！」
「でもこれ結構お気に入りで……」
「だめったらだめ！ 早く着替えて！」
仕方なく紫野が揃えてくれた私服の中からなるべく地味なブラウスとパンツを選ぶと、ようやく美雪から及第点が出た。
本当はスカートやワンピースの方が望ましいとも言われたが、これから食事なのに醤油やケチャップがはねたらどうしようと気にしながら食べるのは疲れると思うので、パンツは死守した。



ダイニングに行くと女生徒たちがちらちらとひかるの方を見た。
良い機会なので自己紹介しようと思ったのだが、近づいていくと、あからさまに目をそらされてしまう。
なんというか、見えない壁を作られている気分だ。
それに、周りを見回せば、彼女たちは皆、そのままお洒落なレストランにでも行けそうな恰好をしている。
「この学園ではね、『寮の中であっても社交のレッスンだと思いなさい』と指導されているの」
そう美雪に言われ、ひかるはなるほどと思った。
「そっか……」
ジャージやジーンズでここに来ていたら、きっと白い目で見られていただろう。
美雪があれこれ言ってくれたから、せめて浮かない格好で来られたのだ。
このダイニングも、小さなセレブたちの社交場なのだから。
ダイニングの方式はセルフサービスになっていて、数種類あるうちの好きな料理を選ぶ

形だった。
色とりどりのパスタや肉厚のステーキ、高級食材を使った寿司など、どれも寮の食事とは思えないほど豪華な料理ばかりで、ひかるは思わずよだれを垂らしそうになった。
とはいえ『社交場』なので、初めということもあり無難にビーフシチューを選ぶことにした。美雪が食べ始めるのを待ってスプーンを持つ。
幸運なことに美雪も同じものを選んできたようだが、優雅な手つきでシチューをすくっている。
（いつもみたいにガツガツ食べない様にしなきゃ……）
見よう見まねで一口入れれば、お肉が蕩ける様に柔らかい。
あまりにも美味しくてついガツガツ食べてしまいそうなのをセーブしながら、美味しい料理を楽しんだ。
「ここはセレブ学園と言われているだけあって、珍しいイベントも色々あるの。先日は寮の新歓パーティだったのだけど、みんな着飾って、それはそれは煌びやかだったわ。黒川さんは間に合わなくて残念だったわね」
そう言って美雪は気の毒そうな目を向けてきたが、ひかるはこっそり（間に合わなくて良かった……）と思った。
ひかるからすればこのダイニングの皆でさえ着飾って見えるのに、これ以上着飾るなんて想像がつかな過ぎて怖い。ただの歓迎会なのだろうに、みんな一体何を目指しているんだろう。
「でもね、秋には学園祭があって、最終日には舞踏会があるんですって。それまでにエスコートしてくれるパートナーを探さなくてはと、みんな躍起になっているの」
「……舞踏会？　何それ、そんなのもあるの?!」
聞きなれない言葉に、ひかるは大きく目を見開いた。
舞踏会って、おとぎ話に出てくるあれのことだろうか。
王子様とお姫様が手と手を取ってくるくる回るやつ。
「エスコートって？　何するの？」
「舞踏会で踊るパートナーが決まったら、そのパートナーが当日は寮まで迎えに来てくれて、会場まで連れてってくれるのよ。最初のダンスは、必ずそのパートナーと踊るの」
「へ〜」
一体美雪はどこの世界の話をしているのだろう。

想像がつかなすぎて、全く話についていけない。
しかしそんなひかるを置き去りに、美幸は話し続ける。
「パートナーだけど、生徒会メンバーは競争率が高いらしいから他を狙うのをおすすめするわ」
「生徒会？　大丈夫、それはないから」
ひかるは生徒会と聞いて眉をひそめた。
たしかに今まで会った生徒会メンバーが皆イケメンなのは同意するが、昴以外は性格が悪そうだった。
「会長の墨島昴様と書記の桃谷泉様は二年生、副会長の藍崎煌君と会計の青野獏君は一年生、それからもう一人の副会長で二年生の緑山さおりさんは生徒会の紅一点ね」
なるほど、ひかるは桃谷という人以外の四人はすでに会っているらしい。
しかし四人会ったうち三人も感じ悪いとか、感じ悪い確率が高すぎると思う。
「生徒会メンバーの人気は本当にすごいのよ？　親衛隊があるくらいなのだから」
眉をひそめているひかるをスルーして、美雪は夢見る乙女のような顔で言った。ひかるの渋い顔は、全く目に入っていないらしい。



「……親衛隊？」
「ええ、親衛隊というか、ファンクラブというか。特に昴様の人気はすごいの」
「……へえ……」
たしかに昴はイケメンで性格も良さそうだったけど、他のメンバーにも親衛隊がいるとは驚きだ。
「親衛隊は怖いのよ？　舞踏会なんてみんなで牽制しあって、抜け駆けなんかしたら殺されちゃうんじゃないかって話よ？　ああ、物理的にっていうんじゃなくて学園的にね」
「学園的……、それも相当怖いけど」
「ふふっ、ただね、一学期の期末考査でトップになった人には優先的にパートナーを指名できる特権が与えられるんですって。だからみんなお勉強も頑張るのよ」
うふふ……、と優雅に微笑む美雪に、ひかるは首を傾げた。
「特権……？」
「トップの人に指名されたら、指名された相手は絶対に断れないのよ」
「ふうん……」
聞く限り、なんとも傍迷惑な特権である。

断れないなんて、他に恋人や好きな人がいたら一体どうするのだ。
（……まぁ、私には関係ないけど）
ひかるは心の中でそう思った。
勉強は頑張るつもりだが、そんな特権は必要ない。
それに、舞踏会に出るようなドレスも持っていないし、別に欲しくもない。
多分、舞踏会になんて出席しないだろう。
「さすがセレブ校だね」
ひかるは揶揄するつもりもなくそう言った。美雪も別に気にする風でもない。
「そうね。ここは政財界で活躍する家の子女ばかりが入る学園だもの。中には一般家庭出身の特待生もいるけど、そういう人たちはとても優秀なの」
特待生制度があるのはひかるも紫野から聞いていた。
彼らは学費や生活費が無償になるかわりに、成績を一定レベルから下げないことと、高校や大学を卒業したら墨島グループの傘下にある企業に就職することが義務付けられている。
「そういえば、黒川さんはどういうお家の方なの？　それとも特待生？」



美雪はきょとんと首を傾げ、そうたずねてきた。
相手によってはデリケートな質問だが、彼女に悪意は一切ないらしい。
ひかるは苦笑しながら、用意していた答えを告げた。
「実は私、墨島家の遠縁なの。遠縁といっても本当に遠くて、墨島グループとは全然関係ない家庭で育ったんだけど。たまたま親戚付き合いがあった人がこの学園を薦めてくれてね。学費を援助して入学させてくれたの。だから私はお嬢様とかではなくて、完全に庶民なの。そういう意味ではセレブでもないし、特待生ではないって感じかなぁ」
肝心な部分をはぐらかしてはいるが、嘘はついていないと思う。
「あら、遠縁でも墨島家と縁があるなんて羨ましいわ。でも、昴様とご親戚だってことはあまり言わない方がいいかもね。それ目当てで近づいてくる人が多そうだもの」
美雪は少し気の毒そうな目でひかるを見た。
我ながら曖昧な説明だったが、それでも彼女は納得してくれたらしい。
今回転校するにあたって、ひかるは紫野と一緒に自分のプロフィールを詰めてきた。
学園理事長の孫娘であると真実を明かすのは簡単だが、それには色々問題があるのだ。
まず、祖父の剣造は学園の理事長はもちろん、墨島家の当主であり、グループの総裁に

君臨している。
ひかるが孫娘であると明かせば、グループ内の派閥争いや後継者問題に巻き込まれる可能性もあるし、嫉妬や羨望の的になり、学園生活に支障が出るかもしれないからだ。
利権がらみですり寄ってくる人や悪意を持って近づいてくる人が必ずいて、大げさではなく、ひかるの身の安全にも関わるのだという。
幼少の頃から墨島家の御曹司として育った昴とは違い、ずっと一般庶民として育ったひかるがそれに耐えるのは難しい、と紫野は言った。
そういうわけで、中心部分をぼかしたようなプロフィールが作られたのだ。
「相田さんは昴さんに興味はないの？」
ひかるがちょっとうかがう様にたずねると、美雪は小さく笑って肩をすくめた。
「まぁ、素敵だとは思うけど、私は昴様も他の生徒会メンバーも、遠目に見ているだけでたくさんだわ」
「そうなんだ」
「ところで私のことは美雪って呼び捨てにしてくれる？　私もひかるって呼びたいわ」
そう言って微笑んだ美雪に、ひかるは隠しごとをしているのが申し訳ない気持ちに



なった。
（一番に友達になってくれた美雪に、せめて他のことは誠実でいよう）
「うん！」
ひかるは元気に返事をすると、とびっきりの笑顔を見せた。

翌日は初登校日。
ひかるは早く起きて、丁寧に準備をした。
制服はグレイのワンピースにボレロで、清楚で可愛らしい。
髪は耳の下で二つに結び、前髪もきちんとそろえた。
美雪の話によると、この学園はかなり身だしなみに気を配らなくてはならないらしい。
そもそも庶民なのだからお嬢様に見せる必要はないが、清潔感だけは損なわないようにしたいと思う。
「おはよう、美雪」
「おはよう、ひかる」
カバンを持って部屋を出ると、ちょうど美雪も出てきたところだった。

呼び捨てがくすぐったくて思わず照れてしまう。
美雪はひかるの上から下まで眺めると、もう一度上がって髪に目をとめた。
「うん。ひかるは元がいいし、そうしてると良家のお嬢さんに見えなくもないわね。でも……ずいぶん地味よねぇ」
「今日は上手に結えたと思うんだけど、何が地味なの？」
「それ、黒ゴムでしょう？　女の子なんだからリボンくらいしなくちゃ。お洒落な女の子はリボンの色を好きな殿方の目や髪の色に合わせたりもするのよ？」
「色に合わせるって……、だいたい私、リボンとか持ってないし」
「もう。ひかるったら。しょうがないから、今日は私のヘアアクセを貸してあげるわ。今度一緒に、あなたに似合うものを買いに行きましょう」
美雪はつんと唇を尖らせてそう言うと、自分の部屋から淡いクリーム色のシュシュを持ってきてひかるの髪につけてくれた。
なんだかんだと面倒見のいい彼女の気持ちがくすぐったい。
そのまま二人で話しながらエントランスまで行くと、何故か人だかりができていて、きゃあきゃあ騒ぐ黄色い声が聞こえてきた。



「なにかしら？」
美雪が訝しげにそう言った時、
「おはよう！　ひかるちゃん！」
と男子の元気な声がした。
エントランスの外を見れば、ブレザーの制服姿の昴がキラキラしながら立っている。
そう、まさしくキラキラだ。
昴の周りを囲む女子たちの目が一斉にひかるの方を向いて、ものすごく怖い。
あきらかに「なんだこいつ」と目が言っている。
昨日の美雪の話からも昴の人気はすさまじいと聞いていたが、今自らの身をもって体感している感じだ。
「よく眠れた？　制服似合ってるね！」
さらにキラキラな笑顔でそう言った昴に、ひかるは頭を抱えそうになった。
昴のせいで、ひかるは登校初日から散々な目にあった。
登校途中で青野漠と緑山さおりという、昨日会った藍崎煌以外の生徒会メンバーにも合

流してしまい、昴、美雪と五人で正門をくぐるはめになった。
門の中には三ダースくらいの女の子の群れがいて、キャーキャーと黄色い声を上げている。
そして彼女たちが昴たちを見つけると、その黄色い声がさらに高くなったのだ。
美雪の話だと、彼女たちは昴をはじめとする生徒会メンバーの親衛隊だかファンクラブだかで、毎朝こうして彼らの登校時間に合わせて待っているのだという。
だから、その憧れの生徒会メンバーがなぜ転校生と一緒に登校してきたのかと、すぐにパニックに陥った。
その中を、ひかるは美雪と共に逃げるようにして教室へ向かったのだ。
昴には、自分が超人気者であることをきちんと自覚して行動して欲しいと思う。
昴は生徒会長である自分には転校生の面倒を見る義務があるなどと宣っていたが、ひかるはきっぱりと、「明日からは大丈夫だから、もう迎えにこないでください」とお願いした。
平穏な学生生活を送るためにも、そっとしておいて欲しい。
どうやら彼は、友達もいないひかるを心配して教室まで送ってあげようと思ったらしい



が、はっきりとひかるに断られて、しゅんとしていた。
断ったら断ったでまた周りの女子たちが鬼のような顔をしているのが、本当に面倒くさい。
しかも、青野や緑山のひかるに対する態度は変わらず冷たい。
とにかく昴のせいで、学園内にたくさん敵を作ってしまったような気がするのだ。

「転校生の黒川ひかるさんです。お家の都合で途中からの入学となりましたが、皆さん仲良くしてください」
一年A組の教室に入ると、担任の赤坂先生に紹介された。
赤坂先生は三十歳前後の男性教師で、担当は化学だという。
シュッとしていて、端正な二枚目風だと思う。
物腰も話し方もソフトだし、結構生徒に人気がある先生なのではないだろうか。
教室に入る前に少し話す時間があったが、ひかるの例の作られた『プロフィール』について親身になってくれ、困ったことがあればなんでも相談するようにとあたたかい声もかけてくれた。

「黒川ひかるです。どうぞよろしくおねがいします」
簡単に自己紹介すれば、クラスの反応はそれぞれだ。
今朝の騒動を知っているらしく、憎らし気にひかるを見つめる女子生徒に、興味のなさそうな子。そんな中、男子生徒の多くは面白そうに彼女を眺めている。
（あ……）
後ろの方の席の男子と目が合った。
昨日正門まで迎えに来てくれた、藍崎煌だ。今朝登校時には見かけなかったが、そういえば同じクラスだと言っていたっけ。
知った顔を見て少し嬉しくなったひかるだったが、彼は興味もなさそうにふいっと目をそらした。
（何よ、感じ悪い……）
ひかるもついムッとしたが、教室にはもう一人、今朝会ったばかりの青野獏もいて、そちらに気を取られた。
獏は獏で、ひかると目が合うと、あからさまに嫌な顔をした。
（何よ、どっちもほんっとーに感じ悪い！）

席は自由席らしく、美雪が呼んでくれたので、彼女の隣に座ることが出来た。
転校するにあたって、ある程度予習してきたため、授業も問題なくついていけそうだ。
そして授業の合間の休憩時間になると、クラスの女の子たち数人がひかるの席に寄ってきた。
敵意むき出しの子や好奇心丸出しの子と色々いるが、皆聞きたいことは決まっていて、
『なぜひかるが昴と一緒に登校してきたのか』だ。
その子たちに、ひかるは「転校生だから気をつかってもらった」とだけ話した。
それによって納得した子も余計に敵意を持った子もいただろうが、ひかるの知ったことではない。
そんな中、あきらかにキラキラ女子のリーダー格のような少女が乱入すると、自己紹介もせずにいきなりひかるを問いただしはじめた。
「昨日も生徒会のメンバーが、三人も、あなたを正門まで迎えに行ったそうね」
「え？　ええ、まあ」
四人で校内を歩く様子は相当目立っていたのだろう。曖昧に返事をしたひかるに、少女は目を吊り上げた。



「転校生が珍しいだけだから。自分が特別だなんて勘違いしない方がいいわよ？」
「……はあ」
「いい？　昴様はみんなの昴様なの。ひとり占めが許されるなんて思わないでよね！」
まくし立てる少女に、ひかるはきょとんと首を傾げた。
「えっと……、私ひとり占めしてる気もないし、するつもりも全然ないけど」
「自分だけ迎えに来てもらって、ひとり占めじゃなくてなんなのよ」
「ああ、それなら大丈夫だよ。元々迎えに来てなんて頼んでないし、お断りもしたから明日からは来ないと思うんだ」
「キーーッ！　せっかく迎えに来てくださった昴様になんてことを言うの?!」
（一体どうすればいいの……？）
何を返しても怒りに火をつけてしまいそうなので、ひかるは黙ることにした。
少女は最後に生徒会親衛隊長の尾野綾香だと名乗って去って行った。
まるで嵐のようで、ひかるはこっそりため息をついた。
放課後、ひかるは部活見学をすることにした。

友達を作るには部活動をするのが一番手っ取り早いと思ったのだ。
同じ目標に向かって一緒に頑張る時間を過ごせば、自然と仲間意識も育つ。
それがスポーツで、チームでやる競技ならなお良いと思う。
幸いひかるは体を動かすのが好きで運動神経も良く、中学まではソフトボール部に入っていた。
だから運動部に入ろうと思ったのだが……
「部費、高すぎでしょ……」
見学した中に、ひかるが思い描いていた部活動は一つもなかった。
体を動かす部活動といえば、馬術部や社交ダンス部などセレブっぽいものばかり。
フェンシング部もあったが、道具などでものすごくお金がかかりそうだ。
（でも……、なければ私が中心になって作ればいいんじゃない？）
そう考えたひかるは、とりあえず職員室をたずね、担任の赤坂先生に相談してみることにした。
しかし赤坂先生の反応はなんとも曖昧なものだった。
「黒川さんの熱意はわかるけど、新しい部を作るのは簡単じゃなくてね……」



赤坂先生は困ったように眉尻を下げる。
「それに、部活動はメンバーが五人以上揃わないと認可されないんだ」
「五人以上？　五人いればいいんですね？」
そう言ってひかるがずいっと前に乗り出すと、赤坂先生はぐっと眉根を寄せた。
「黒川さん……、なんかいい匂いするけど、香水でもつけてるの？」
「……へ？」
ひかるは自分の襟や袖口に鼻を近づけてくんくんと嗅いだ。
「……香水なんて、付けてませんけど」
買ったこともないし、そもそも興味もない。
「……そう？」
赤坂先生が訝しげにひかるを見ている。
「とりあえず、部活動は人数を集めてからまたお願いに来ます。失礼しました」
ひかるは挨拶するとそそくさと職員室を出ていった。
そしてスカートのポケットの上にそっと手をやると、「危ない危ない」と呟いた。
ポケットには、さっき部活動見学をしながら食べていたクッキーが入っていた。

紫野からもらった、チョコレートでコーティングされた最高級のクッキーだ。
初めて口に入れた時からその美味しさに魅了されたひかるに、紫野が笑いながら「時々差し入れましょうね」と言ってくれたものである。
多分、赤坂先生はクッキーの匂いに気づいてあんなことを言ったのだと思う。
お菓子の持ち込みが禁止だとは聞いていないが、もし見つかって取り上げられたりしたらきっとひかるは泣いてしまう。
（よかった〜、とりあげられなくて！　早く帰って残りも食べちゃお！）
ひかるは足取りも軽く、校舎を後にしたのだった。

翌朝は昴が迎えに来ることもなく美雪と一緒に登校したのだが、結局校舎のエントランスで昴と会ってしまった。
昴はファンの女生徒たちに囲まれていたのだが、ひかるの姿を見つけると「ひかるちゃん、おはよう！」と嬉しそうに声をかけてきた。
「昴さん……、おはようございます」
ひかるが小さくお辞儀をすると、昴は女生徒たちの垣根をかき分けてこちらに走って



来た。
（怖い怖い）
昴を見送る女生徒たちの顔が般若のお面に見える。
「ひかるちゃん、昨日もよく寝られた？」
あっという間に目の前までやって来た昴は、そう言うとふいっとひかるの顔を覗き込んだ。
「は、はい……、おかげさまで」
「何か困ってることはない？」
「大丈夫です。ありがとうございます」
「遠慮しないでなんでも言ってね」
そこまで言って、昴はぐいっとひかるの耳元に口を近づけた。
「ほら僕、紫野さんからもひかるちゃんのこと頼まれてるしさ」
こそこそと耳元で囁かれるのがなんともこそばゆい。
硬直するひかるに、女生徒たちがキャーキャー騒ぐ声が聞こえてくる。
「あ、そうだ、ＬＩＭＥ交換しようよ。そしたらすぐに連絡とれるでしょ？」

キラキラの笑顔を向けられ、ひかるはこくこくとうなずいた。

昴が笑顔を見せるたび、背後の女生徒たちから悲鳴があがる。

平穏な学生生活を送るためには極力昴と距離を置いた方がいいのだろうが、彼は親戚としての責任感でひかるを気にかけてくれているのだろう。

さすがに迎えは断ったが、そんな昴には感謝もしているし、彼の優しさをあまり無碍にしたくもない。

「あの……、昴さん、色々ありがとうございます。お迎えも、断ってしまってごめんなさい」

そう言って見上げると、昴はさらに微笑



立ち読みサンプルはここまで

んだ。

「うん。それは残念だったけど、ちょっと僕も考えなしだったよね。こういう状況を見ればひかるちゃんの気持ちもわかるし。でも……、ぼくはいつだってひかるちゃんの味方だからね」

そう言うと昴はひかるの頭を撫でた。

うわぁっと思った瞬間、周囲から悲鳴とも怒声ともつかぬどよめきが起きる。

「だめだめ！　行こう、ひかる！　これ以上は危険だわ！」

脇から美雪に引っ張られ、ひかるはようやく校舎へ向かった。

後ろを振り返ると、昴は笑顔で手を振っていて、周囲の女生徒たちは悔しそうにひかるを睨んでいた。

校舎に入ると、廊下でも、教室でも、すれ違う生徒たちがちらちらと横目で見てくる。

話しかけるわけでもなく遠巻きに見られたり、聞こえるか聞こえないような声でこそこそと噂話をされるのは、正直気分が悪い。

ひかるは、もうすっかり『墨島昴が目をかけている転校生』として学園の有名人になったようだ。